

生（現室工大）が行うことになりました。さて？？ということで、私が以前に行っていたトランススチルベンおよびジメチルアミノニトロスチルベンなどスチルベンにドナー・アクセプターの置換基を導入した誘導体の光学過程について、外部電場効果の測定を行いました。外部電場によってトランス-シスの異性化や光誘起分子内電荷移動速度が変化することを発表することができ、何とか居場所を確保することができました。またこの論文がでたころから、研究室で細胞などを扱うことになり、その立ち上げから、蛍光寿命イメージングなどを用いた細胞測定までを行うようになりました。細胞を育てるのは楽しく、年末年始関係なく実験に没頭したのを覚えています。全く新しいことをするのは楽しいものです。細胞生物学から細胞培養のプロトコルまで

貪欲に知識や技術を吸収し、今では学生に指導できるまでになりました。物理化学の研究者でいながら、細胞を自ら育てそして測定を行ったことが次に繋がったと思います。このような機会を頂いた太田先生には大変感謝しています。

#### 【東北大】

約2年前より現所属の東北大学大学院薬学研究科に異動し、今まで行ってきた物理化学的手法や現象を生体系に応用することを目指しています。細胞とタンパク質を対象に、紫外共鳴・低振動ラマンなどを用いた計測、光化学反応を用いた制御、そしてメカノバイオロジーの一つとして、今まで行ってきた電場効果を生体系に応用すること進めています。「新しい場所に来たら、新しいことを行う」をポリシーに日々

精進しています。私が学生だった頃と比べると分子分光光学を中心にした研究室は漸減していると思います。しかし、この状況がむしろチャンスであり、分光光学の知識・技術・経験を生命科学に展開できることをアピールして行きたいと考えています。今はお金も装置も無く、日々自転車操業で、「助からない」と思うことがしばしばですが、幸いにも学生には恵まれていることから、今回も何とか「助かるのではないかと」頑張っています。西先生が御定年されてから、分子研に行く回数も減ってしまいました。今後も共同利用・共同研究として、立ち上がったばかりの貧乏研究室を助けて頂ければ幸いです。

## 覧古考新04 | 1976年

分子研は独立の研究所である。分子研の場合いわば「寄るべき大樹の陰」をもたないけれども、他方制約をうけることも少なく、何よりも研究者の連帯意識が直接に肌身に感ぜられる。

.....

研究所がその性格に応じて新しい制度を導入するためには、その独立性は大切な条件である。いづれにせよ、共同利用機関とは何かに対するほんとうの答えは、実績を積み重ねた歴史によってなされるであろう。われわれはそのような歴史を創ろうとしている。

分子研は発足して日は未だ浅いのであるが、10年余の準備期間を通じて研究者の間にはその運営に関して、あるコンセンサスが形成されていることも否定できない。分子研は第一に研究所としての意志の独立性を保持することは云うまでもないが、同時に直接これに参加する人、そうでない人の如何にかかわらず、その研究を鼓舞する中核としての役割を果さなければならない。そんなのぞみをかけて、「分子研レターズ」が研究者の語り合う共通の場として役だつことを希望する。

分子研レターズ No.1 「分子研レターズ創刊によせて」(1976年)

赤松秀雄（分子科学研究所長）